

Ayami Nakatani (ed.),
Fashionable Traditions: Asian Handmade Textiles in Motion

■出版地：London ■出版社：Lexington Books ■出版年：2020年 ■総頁数：x+305pp ■定価：\$115.00

田本 はる菜*

ケミカルな色彩の「民族衣装」を着せられた4体のマネキン、やはり色鮮やかな糸で模様を織り出していく熟練した手つき——本書の表紙を飾る2枚の写真は、見る人に若干の戸惑いを感じさせるかもしれない。そこにある光景は、いわゆる「伝統」や「手仕事」を思わせるものでありながら、その真逆にイメージされる「流行」や「既製品」との親和性も感じさせるからだ。

本書は、今日めまぐるしい変化の中にある、アジア地域の手織物の生産・流通・消費の動態を扱った論文集である。本文は序論に続く計4部、14の論文から構成され、インド、インドネシア、日本を扱った11本と、中国、オーストラリア、トルコを扱った3本が収められている。なお、本書は2014–2017年度の科研費助成事業「アジア地域における布工芸品の生産・流通・消費をめぐる文化人類学的研究」（代表：中谷文美）の成果であるが、執筆者はアジア、北米、ヨーロッパを含む地域から参加しており、本書の問題意識が国内外で広く共有されていることがうかがえる。

序論で示されるように、本書は「創られた伝統」のアイデアと、豊富な蓄積をもつ布／服飾の人類学を下敷きにしている。それらの研究は、「伝統」が集団や権威の確立のために創り出されること、そこでの社会的境界の創出に、衣服や布が重要な役割を果たすことを明らかにしてきた。本書が対象とするのも、布を通じて社会的境界が交渉され、引き直されていく過程である（p. 1）。ただしその際に本書が目指すのは、今日グローバルな影響力をもつ、文化遺産化やファッション化の動態である。文化の連続性と真正性を求める遺産言説と、他方でコンスタントな変化を求める

ファッション市場は、いずれもローカルな布の生産と流通に影響を与えている。本書の「ファッションナブルな伝統」という表現は、こうした矛盾をはらんだ力を含意するという（p. 2）。

ただし本書は、この一見すると西洋近代的システムの支配に思われる状況が、実は一方的なものではないとする。編者によれば、ここでは「ファッション」を、西洋に特権的な現象や、西洋にのみルーツをもつものとしては扱わず、「多様で競合する複数のファッションのシステム」（p. 3）の関係性こそを問題にするという。すなわち、ローカルな服飾の遺産化やトレンド化は、近代化や西洋化よりも、異なる集団が想定するファッションのシステムの「もつれあった関係」として捉えられることになる。本書では、その具体的な状況——事例では織り手、NGO職員、バイヤー、観光客などが交わる場面——を記述する一方で、そこに働くグローバル、ナショナルな影響力に注目することが示される（p. 3）。

こうした作業によって本書が挑戦するのは、現在進行中の開発の実態であるという。布が生み出されるローカルな文脈をなおざりにしたまま、遺産や商品としてもてはやす動きに抗して、作り手たちが経験している複雑な現実を捉え、伝えることが、ここでの大きな目的である（p. 13）。では、こうした問題意識に各事例はどのように応えているのだろうか。以下では章ごとの内容を見ていくことにしたい。

第1部「伝統の中のファッションの動態」は、固定的に捉えられがちな非西洋の服飾／ファッションのシステムの動態に焦点を当てる。

第1章「インドネシア・フローレスのイカットとグ

* 北海道大学

ローバルファッションへの軌跡」(Willemijin de Jong)は、「不変の伝統」ではなく、ローカルなモダニティの過程にある手織布の姿を提示する。布の模様や色が流行を左右する現地の服飾システムでは、熟練の織り手を起点に、特定のスタイルがモダンなものとして普及したり、事後的に「伝統化」されたりしてきた。今日ではインドネシア国家や教会、西洋のツーリズムも新たなデザインの開発を促すが、その発展も織り手の熟練技術やアイデアに大きく依存する。布がたどるこの入り組んだ道筋は、現地に固有のモダニティの過程を示しているという。

第2章「民族衣装の『新スタイル』——中国雲南省モンにおける伝統とファッションの間の衣装」(宮脇千絵)もまた、民族衣装を不変の伝統とみなすことに抗して、中国雲南省モンの既製品化する衣装について論じる。生活様式の変化に伴い、モンの衣装製作は既製品の購入に代替され、より個人の嗜好を反映するものになっている。しかしそれは西洋の衣装への全面的移行を意味しない。モンはあくまで「(節目に)モンの衣装を着る」という規範を守りつつ、制約の課されないデザインに個々人の選択を反映させる。ここで行われているのは服飾規範の再解釈であり、さらに衣装を通じた自他の差異化であるという。

第3章「パシュミナショール——北インド・ラダックからカシミールへの連続と変化」(Monisha Ahmed)は、地域の政治経済、欧米のファッショントレンドに影響されてきたパシュミナショールの歴史から、その連続性と変化を論じる。インドで歴史的に階層、富と結びつき、欧米で高級ファッションとして成功したパシュミナショールは、機械織りの安価な製品に打撃を受ける一方で、継続的な需要の高さに支えられてきた。この需要は、高度な伝統技術の復興、遊牧・牧畜民による繊維供給の安定化、デザイナーによる製品開発など、生産の場にも変化をもたらしている。

第2部「遺産をめぐる政治とその先」は、文化遺産という枠組みに注目し、権威的な「遺産化」がもたらす作用や、それとは異なる個人や組織による手織物の継承を論じる。

第4章「文化をリスト化する——インドネシアにおける境界をめぐる政治と手織布の遺産化」(中谷文美)は、文化の選別とリスト化を特徴とする「遺産化」の代償を明るみに出す。バラエティ豊かなインドネシアの手織布は、「多様性の中の統一」を打ち出す国家統合の戦略に、また地方組織どうしのアイデンティティ

をめぐる競合に取り込まれてきた。この手織物の主流化は、国や地域、集団を象徴する特定のモチーフ・技法の選択的な普及を促すが、そこでは集団内部の差異や境界の曖昧さは捨象される。ここから、文化の多様性を強調する遺産化が、その反面、文化の単純化と一元化を促すことを認識すべきであると指摘する。

第5章「文化とテクノロジーのあいだ——インド・タミルナドゥのテーマサリーと遺産の視覚表現」(Aarti Kawlra)は、近年成長を見せるテーマサリー(コンピュータ処理された画像や文字のモチーフを手作業で織り込んだサリー)を扱う。生産者たちが戦略的に用いるモチーフには、支配的な北インド・ヒンドゥー文化由来のイメージだけでなく、対抗する南インド・タミル文化由来のイメージ、さらには世界遺産の権威的イメージが含まれる。彼らは権威的な遺産言説、現代的技術、市場動向を取り込みながら、伝統を巧みに操作する企業家としてグローバル市場に参入しているという。

第6章「諸刃の剣としての『遺産化』——日本の西陣絹織物のジレンマ」(Okpyo Moon)は、前章とは対照的に、「遺産化」が関係者にもたらすジレンマを、京都・西陣織を例に論じる。産業として低迷を続ける西陣織には、国による数々の支援策が講じられてきたが、それらは現場や生産者の感覚からは乖離している。例えば「伝統工芸師」や「人間国宝」という一部の職人への評価は、西陣織のような社会的分業に基づく工芸産業の保護には有効に機能しない。また西陣織を「文化」として保護する遺産化は、価格上昇によって市場の縮小を促し、産業としての維持を阻害するジレンマを生んでいるという。

第7章「過疎のコミュニティで織りの知識を受け継ぐ——日本・京都における藤織りの保存」(金谷美和)は、文化遺産システムが前提とする「ローカルな実践者」がほぼいなくなった丹後の藤織りの継承を取り上げる。災害や過疎で衰退した藤織りを支えているのは、外部から受け入れた講習生からなる組合である。その活動は技術継承のみならず、講習生が現地の自然・社会とつながる機会を提供している。こうしたコミュニティの形は、ユネスコや日本の行政が無形文化遺産の継承者として想定してきた、固定的なコミュニティの定義とは異なると指摘される。

第3部「競合する価値づけと仲介者の役割」は、手織布のプロモーションと価値づけにおける仲介者の働きに焦点を当てる。

第8章「日本の紬のブランド化——消費者と民藝運動の媒介としての着物雑誌」(杉本星子)は、紬のブランド化への民藝運動の関わりを、着物雑誌というメディアに注目して探る。歴史的に絹織物より低品質とみなされ、大衆のファッションアイテムだった紬は、明治期の絹織りの機械化・大量生産の中で、民藝運動により伝統的手仕事として見出される。戦後の着物低迷期に創刊された『美しいキモノ』は、民藝運動に関係する人物や着物を取り上げ、「機械製」と「手織り」の二項対立という思想をブランディングに取り入れながら、紬を高価な伝統工芸品へ転換することに寄与してきたとされる。

第9章「『工芸』から『芸術』へ? アーネムランド先住民女性の織物の軌跡」(窪田幸子)は、アボリジニ女性の織りをめぐる、アートワールドでの位置づけの変化を扱う。西洋由来の芸術と工芸のヒエラルキーに従い、男性の樹皮画芸術よりも価値の低い工芸とみなされてきた女性の織りは、西洋のアートワールドにおけるヒエラルキーの見直しに伴い、「芸術」として評価されるようになった。ただし女性の織物は、文化的・技術的制約から男性の樹皮画とは異なる発展をたどっており、この状況がアボリジニアート・クラフトの文脈に即した変化でもあることが指摘される。

第10章「現代インドネシア・バリにおける地域を超えたイカット——イカット生産とマーケティングにおける遺産の想像とモダニティの想像」(Susan Rodgers)は、イカットを扱う2種類のビジネスモデルを批判的に検討している。イカット布を、高級ファッション産業、フェアトレードのそれぞれに結びつける2つのビジネスには、遺産としての織りの伝統を重視する姿勢がある。一方でそのマーケティングは、織りのローカルな文脈よりも、市場や遺産言説との調和を志向しており、ある種の土着の声が無視されているという。

第4部「グローバルな消費者とのアンビバレントな出会い」は、越境的な手織布の商品化により生じている、ローカルな現場の複雑な反応を扱う。

第11章「刺繍の開発——インド・カッチにおけるムトワと湿地祭り (Rann Utsav)」(Michele A. Hardy)は、ムスリムコミュニティ・ムトワの刺繍を取り上げ、女性の地位や女性性と密接に結びついていた刺繍の商業化を扱う。NGOの支援で始まった刺繍の商業化は、外部者や男性の刺繍への介入を強め、結果的にムトワ女性の関与を周縁化した。また観光化が進む中

で、女性たちは「遅れた」伝統としての刺繍を厭い、現代性や汎イスラムコミュニティの一員であることを刺繍で表現するようになった。ここから刺繍への開発介入が、文化的アイデンティティ、ジェンダーの平等性を損なったとして糾弾される。

第12章「技術の戦略的選択——西インド・グジャラートの女神儀礼のための染色・プリント布」(上羽陽子)は、宗教的目的でローカルに製作される布が、いかにグローバル市場に参入するのかを検討する。儀礼の布を求めるローカルな消費者は、色やモチーフを重視する一方で技法を問わないため、製作には化学染色の大量生産方式が採られる。しかし観賞用の布が求められるグローバル市場では、手描き、天然染色という「伝統技法」が重視される。生産者は、宗教的布が「伝統技法」と結びついているという幻想を巧みに利用し、それと矛盾しない技法を選択的に用いながらグローバル市場に参入しているという。

第13章「伝統をパッチワークする——トルコのファッション・カーペットの流行」(田村うらら)は、トルコのカーペット産業に生じた「ファストファッション化」を論じる。国内の中古や質の悪い手織りカーペットを再加工したパッチワークラグは、安価なインテリアとして国内外で成功を収め、カーペット産業の不況を一時的に支えている。しかし生産流通に携わる人々はこれを「本物」とみなしておらず、本物の販売機会が減ることにジレンマを感じている。パッチワークラグは、真正性よりも回転の速さや安さを追求する、伝統のファストファッション化であり、視覚重視のオンライン販売もその傾向を助長している。

第14章「手織布は何をしているのか?——東インドネシア・フローレスの織物をしない人々におけるモノと原史」(青木恵里子)は、公的な言説が布の価値を顕示するのと対照的に、ローカルな文脈で人に意識されずに行使される布の力に注目する。布を織らずに近隣から入手する地域では、嫁の与え手から受け手への手織布の贈与が必要とされる。布には受け手を保護する力が期待されており、それは贈与交換を促す暗黙の力でもあるという。布を織る地域で織物の商業化が進むと、織らない地域でも布の流通量が増えるが、購入された手織布は、贈与交換の中で力を発揮し続けているという。

以上、各章の内容を足早に見てきた。4部の構成が明瞭に示すように、本書はよりローカルな社会を志向するアクターの振る舞いから、ナショナル、グローバ

ルな出会いがそこにもたらす制約と複雑性へと重心を移しながら、アジアの手織物の生産・流通・消費をつくり上げる「もつれあった関係」を具体的に描き出している。本文に依拠すれば、まずローカルな影響の強い服飾／ファッションの動態から出発し（第1部）、ナショナル、グローバルな文化遺産システムと市場の影響に焦点を当て（第2部）、さらにその越境的な生産・流通・消費の複雑さに光を当てるために、仲介者の役割（第3部）、ローカルな場のアンビバレントな反応（第4部）に注目する。では、こうした本書の豊富な記述には、どのような特徴と成果が挙げられるだろうか。

まず明らかなのは、本書が布の社会的・政治的な働きというオーソドックスなテーマを踏襲しながらも、従来の布／服飾の人類学や、「伝統の創造論」が想定してきたよりも広いスケールを対象にしていることである。先述のように、布／服飾の人類学は、布が社会関係を創出したり、政治的に動員されることに注目してきた。この分野の古典ともいえる『布と人間』は、そうした現象が、小規模な地域社会から多様な形態の国家にまで共通して見られることを示した（ワイナー&シュナイダー 1995）。また「伝統の創造論」が、ナショナリズムや民族運動という文脈で議論を喚起してきたように、「伝統の操作」は多くの場合、エスニシティや国家のような共同体と結びつけられてきたといえるだろう。

一方本書が射程に入れるのは、人類という規模で「伝統」および「トレンド」の共有が推し進められる状況である。このボーダレスな価値の共有を進めるのは、ユネスコを頂点とする国際的な遺産レジームであり、ローカルな織りを取り込んでいくグローバルなファッション産業やアートワールドであり、またテクノロジーの普及でもある。本書は生産に軸を置きながら、作り手がこの潮流にどのように対応しているのかを詳細に描き出す。そこでは、遺産言説が求める「真正性」や「代表性」、あるいは市場が求める「脱文化」という需要を把握し、それを生産に取り込んでいく作り手の姿が明らかにされる（4章、5章、6章、12章）。

またこのスケールの変更によって、本書は人類学一般の「ローカル」への偏重によって周縁化されてきたアクターにも光を当てている。例えば、文化遺産への意識の高いコスモポリタンエリート（5章）、アジアのテキスタイルの復興を支援する欧米人企業家（10

章）、手織布を好みのインテリアとして購入する世界中のネットユーザー（13章）もまた、今日の「伝統テキスタイル／手織り」の主流化を構成するアクターである。このように本書は、布生産の固有の文脈に何のルーツももたず、互いに対面すらない人々の強い影響下で、「伝統」や「トレンド」が創り出され、共有される状況を明らかにしている。言い換えれば、より多くの資本、情報や技術へのアクセスをもつ側のグローバルな覇権に、アジアの布が動員される状況を説得的に示し、生産の場からそれに警鐘を鳴らしてもいる。

他方で本書のもう一つの成果は、そうした支配的状況が一筋縄ではいかないことも同時に明らかにしていることである。冒頭述べたように、本書ではローカルな服飾の遺産化やファッション化を、西洋近代のシステムの支配として単純化するのではなく、複数のアクターの相互作用からなる複雑な過程として問題にしている。これは「多様で競合する複数のシステム」という、本書におけるファッションの再定位と関連する。「ファッション」をもつばら西洋と結びつける研究姿勢は、その支配的影響力への批判を含んでいた一方で、「西洋／その他」という二項対立を踏襲し（p.3）、「その他（の文化や社会）」の影響力や多様性を等閑視してきたともいえるからである。

「西洋／その他」の単純な二分法に対して示されるのは、「西洋」がローカルな服飾の価値を一義的かつ永続的に定めるのではなく、多様なアクターによってその価値や意味が交渉され、更新されていく（p.11）ことである。生産者と消費者、それにアートアドバイザーやキュレーター（9章）、雑誌メディア（8章）といった多様な仲介者は、ローカルな布生産に異なる関心を向けている。したがって、地元の人々にとって実用性のない布がグローバル市場で「真正な」ものとして取り引きされたり（12章）、生産者やディーラーが「非真正」とみなす製品に消費者がトレンドの価値を見出したりする（13章）。これらは、本書が強調する、アジアの手織布をとりまく「複雑な現実」をよく表す箇所でもある。

さらに「西洋／その他」の二分法に抗して明らかにされるのは、「その他」の社会の能動性や多様性でもある。とりわけ第1部では、非西洋のローカルな作り手たちが生み出す流行に注目することで、西洋のファッションに回収されえない、個別の文脈に根ざして変化を続けるファッションに光が当てられる（1

章、2章)。また多様性についていえば、本書では一
国の中の多様性が扱われているのも特徴的である。同
じ日本の事例でも、遺産システムの影響を強く受ける
西陣織(6章)と、遺産システムが想定しない形で技
術伝承を行う藤織りの例(7章)は対照的である。さ
らにインドネシアについては、ローカルな布の遺産化
と商品化が目立つ一方で(4章、10章)、織りの商品
化の影響を直接被らなかつた「織らない」地域が、布
のローカルな働きを維持させているという逆説的な例
も示される(14章)。

このように本書は、アジアの手織布生産に広域に作
用する遺産レジームや市場の影響力と、その複雑な媒
介の過程、そして西洋以外の「その他」に一括されえ
ないアジアの手織布生産の多様なあり方を、豊かな事
例から提示することに成功しているといえる。本書の
こうした記述は、越境的な遺産化とファッション化に
ともに注目することで、旧来の布/服飾の人類学の射
程を広げ、さらに未だ西洋中心主義的な「ファッショ
ン」の含意を、複雑さをはらんだものへと練り直すこ
とに貢献している。

こうした本書の成果を認めた上で、なお浮かんでき
た疑問について、最後に二点触れておきたい。

一つ目は、ここでの「アジア」という対象設定が、
本書全体を通じた「ファッション」の捉え直しにあたり、
どのような積極的意義をもつのか、という点である。
序論では、本書が戦略的に選んだアジアの各地
が、「布生産の豊かで多様な伝統で知られている」
(p. 2) ことが示されている。またそれゆえに、遺産化
とトレンド化の影響とともに晒され、布/服飾のあり
方を複雑に作り上げていることは各章を通じてよく理
解される。すでに述べたように、これは伝統/近代、
西洋/その他の二項対立に還元されない「ファッショ
ン」のあり方を明らかにするものである。ではそうした
「もつれあった関係」としての布/服飾の様相を、
「アジア」から提示したことの意義はどのように理解
すべきだろうか。本書が示す、生産者とグローバルな
消費者の不均衡な関係や、異質なアクターの関与によ
る布の価値の創出は、「アジア」以外の布生産の状況
とは異なるのだろうか。もしくは、「アジア」に特有
のアクターの協調や対立、あるいは没交渉のあらわれ
方があるとするなら、それはどのようなものだろう
か。こうした点に言及することは、ファッションを
「もつれあった関係」として捉え直すという一般的な
課題に、他でもない「アジア」の現場から取り組むこ

との意義を、より明確に提示することにつながったの
ではないかと考える。

二つ目は、商品化や遺産化への作り手たちの対応
に、身体や道具を介した技術の「経験」がどのように
関わっているのか、という点である。

本書では、例えば職人たちが手間のかかる天然染色
よりも化学染色を歓迎することや(12章)、かつて女
性性と密接に結びついていた刺繍が、遅れたものとみ
なされるようになったこと(11章)が示される。こう
した事例は、作り手たちが布生産を、作業がもたら
す身体的負担や、慣習的ジェンダー規範と結びついた
身振りといった、経験の次元からも捉えていることを
思わせる。確かに本書では、作り手が時間や労働の節
約、選択肢の拡大から新たな素材や技術を選ぶことが
示されるが(p. 11)、そこには作り手の身体的傾向に
も依存する、技術選択の複雑なプロセスは存在しない
のだろうか。手織布生産の経済や政治との関わりに織
細な注意を払う本書の記述は、身体やモノを介したミ
クロな技術実践の次元により踏み込んで展開すること
も可能なのではないだろうか。

これに関連して、インドのムスリム敷物職人を対象
としたS・ヴェンカテーサン(Venkatesan 2009)は、
織りの仕事が、職人たちにとって特定の身体的、技術
的、社会的な条件によって実現されているとし、その
複雑な実践のあり方を理解しない開発の試みが、しば
しば失敗しうることを示している。例えば、織り手た
ちにとって改良機を受容するかどうかは、単一の技術
的問題の解決ではなく、彼らの身体的熟練、作業手順
との兼ね合い、家計への配慮、世代に応じたハビトゥ
スなどから複合的になされる選択だからである
(Venkatesan 2009: 243-265)。本書では、流通・消費に
またがる実践の広がりによって焦点を当てる上で、技術
の「経験」はあえて後景化されたのかもしれない。一方
で、作り手の現実を細部にわたって拾い上げようとす
るこうした議論と、同じく作り手の現実に真摯に向き
合おうとする本書の対話が開く可能性を想像してしま
う。

以上のように本書は、今日のアジア地域の手織布を
めぐる複雑な動態を、作り手に寄り添ったきめ細やか
な記述によって提示してくれるだけでなく、その豊富
な内容によって、更なる議論の可能性を喚起する魅力
的な論集である。一読すれば、本書評では十分に触れ
られなかつた論点をいくつも発見するだろう。本書が
布/服飾の人類学のみならず、開発、文化遺産、観

光、アート、モノ研究などに興味をもつ幅広い読者にとって有意義な知見をもたらす一冊であることは間違いない。

参照文献

(日本語文献)

ワイナー・アネット・B & シュナイダー・ジェーン (編)
1995 『布と人間』 佐野敏行 (訳)、ドメス出版。

(英語文献)

Venkatesan, Soumhya

2009 *Craft Matters: Artisans, Development and the Indian Nation*. Orient Blackswan.